

彷徨する「啞」

～「聾啞／癡瘂」と「deaf-mute／deaf & dumb」の認知意味論的比較～

末 森 明 夫

本稿では古代より中世にわたる時期に編纂された字書群にみられる聾啞吃語彙の編輯をおこなうことにより、聾啞語彙誌の拡充および系譜化による精緻化をはかった。その結果、「啞」は中世初期までは現在のような意味はなく、「瘖」や「瘂」が現在の「啞」の意味に該当する意味をあてがわれており、中世（鎌倉時代・室町時代）に入ると次第に現在のような意味を持つようになったものの、「吃り」や「稚児のなく声」といった意味をも包含するなど、著しい多義性を示すことが明らかになった。このような古代・中世にみられる著しい多義性を「啞」語誌・語史に位置づけることにより、現在の「聾史」概念に照射することをはかる。

1. はじめに

日本語には大和語彙および漢語、さらには借用語を包摂する多様な聾啞吃態語彙が存在し、文脈に応じた多義性を表出してきた（岡山1935、末森2016c）。しかしながら、20世紀後半以降は聾啞語彙の急速な収斂現象が見られ、啞語彙は団体名称や学術用語以外の場ではほぼ死語化している。本稿では日本の聾啞吃態語彙史における啞語彙の形式・意味・語法の変容を認知意味論に立脚して分析することにより、啞語彙の定位の精緻化をおこなうと共に、「聾史」という用語に対する一私見を述べることにより「聾史」語誌に資することを図る。

2. 聾啞語彙誌史と身体性

山下（2015）は日本における聾文化論の受容が欧米の聾文化論に偏っているき

らいあるとし、欧米でも戦略的文化本質主義と構築主義の葛藤および相克の論争（Mirzoeff 1995, Krentz 2007）があることを踏まえた上で、日本のような非欧米文化圏における欧米聾文化論の受容過程と変容、さらには戦略的文化本質主義と構築主義の相克のためのあらたな deafness 論（聴覚障害身体論）の拡充の必要性を唱えている。

「語史」と「語誌」については古くよりさまざまな見解がある。本稿では『国語学大辞典』所収見出項目にしたがい、ある語の形式・意味・用法の通時的变化を包括的に捉える概念を「語史」とし、その変容に伴う事象を網羅的に記述したものを「語誌」とする。この視点にのっとるならば、「聾啞吃態語彙史」と「聾啞吃態語彙誌」の包摂概念および射程の相違についても検討の余地はあるものと考えられる。語彙誌・史、特に古代中世における聾啞吃態語彙誌史および概念

編制史を整理していくことは、上記の deafness論の深化をはかるうえでも必要不可欠な作業であろう。

3. 聾啞語彙史

筆者は岡山（1935）が発表した聾啞語彙誌の批判的考証をふまえ、聾啞語彙誌を基盤とする聾概念編制史研究の意義を提唱した（末森2016c）。しかし、古代・中世の字書群における聾啞語彙誌の包括的な発表はまだおこなっていない（末森：参考文献を参照）。本稿では古代後期および中世に祖本が編まれた字書群などに載録されている啞語彙を焦点化し、啞語彙誌における定位及び系譜化を図った。

日本最初の字書とも言われている高山寺本『篆隸万象名義』⁽¹⁾には啞語彙（字彙）「啞」「啞」「瘖」「瘖」が載録されている他、吃語彙「噤」「吃」が載録されてい

る。啞語彙の語義（字義）をみると、「啞」は「大呼」、「啞」は「笑声」、「瘖」は「不言」、「瘖」は「瘖に同じ」となっており、「啞」と「啞」の語義が現在とは大きく異なっていたことが窺われる。

天治本『新撰字鏡』⁽²⁾には啞語彙「啞」「啞」「瘖」「瘖」および吃語彙「噤」「吃」が載録されており、全般的に『篆隸万象名義』に似た傾向が見られる。

観智院本『類聚名義抄』⁽³⁾には啞語彙「啞」「啞」「瘖」「瘖」および吃語彙「噤」「吃」「吃」「噤吃」が載録されている。しかしながら、語義（訓読）をみると「瘖」は「オフシ」のみあてられているのに対し、「啞」や「瘖」は「オフシ」と「コトトモリ」が併記されている他、「啞」は類義語に「瘖」があてられている他「ナク」「サケフ」が記されている。

天文本『字鏡鈔』⁽⁴⁾には啞語彙「啞」「啞」「瘖」「瘖」、吃語彙「吃」「啞」の他、「嘿」が載録されている。「啞」には「ワラフ」「オフシ」「コトトモリ」が併記されている他、「啞」や「瘖」も「ヲフシ」と「コトトモリ」が併記されている。一方「瘖」は「ヲフシ」の他に「サケフ」「ナク」「キハメテナクコエ」などが併記されおり、多様な訓読があてられていたことが窺われる。「嘿」は同字「黙」があてられている他「モノイハス」が併記されている。

龍谷大本『字鏡集』⁽⁵⁾には啞語彙「啞」「啞」「瘖」「瘖」および吃語彙「吃」「噤」「呢」が載録されている。「啞」には「ヲフシ」はあてられていないものの「コトトモリ」

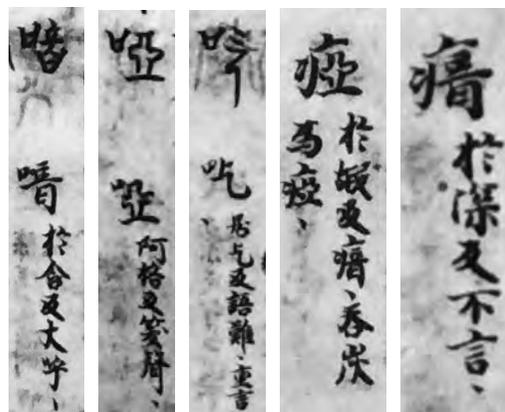


図1 『篆隸万象名義』所収啞吃語彙
「啞」9才 4行1段；「啞」11才 6行2段；「吃」
13才 4行1段；「瘖」74ウ 3行1段；「瘖」
80ウ 2行1段。

(1) 『篆隸万象名義』 祖本9世紀前半成立。高山寺本（高山寺蔵）1114年書写。
(2) 天治本『新撰字鏡』 祖本9世紀末成立。天治本（京大蔵）1124年書写。
(3) 観智院本『類聚名義抄』 祖本11世紀末成立。観智院本（天理図書館蔵）鎌倉中期書写。
(4) 天文本『字鏡鈔』『字鏡抄』20巻本祖本。天文本（尊経閣文庫蔵）1547年書写。
(5) 龍谷大本『字鏡集』 龍谷大本（龍谷大学蔵）室町初期書写。

に加えて「チコノナクコエ」が見られる。応永本『字鏡集』⁽⁶⁾も龍谷大本『字鏡集』に準じるものの、「啞」の訓からは「チコノナクコエ」が消え、「ヲシ」や「不言」が加わっている。

世尊寺本『字鏡』⁽⁷⁾、黒川本『音訓篇立』⁽⁸⁾は「瘖」「瘖」のみが載録されており、訓はほぼ同じである。

『捨篇目集』⁽⁹⁾および米沢文庫本『倭玉篇』⁽¹⁰⁾には「啞」「啞」「瘖」「瘖」の4字が載録されているものの、訓は『字鏡集』系統に比べると大幅に減っている。ただ、「オシ」と「コトモリ」の併記は続いている。一方、『玉篇略』⁽¹¹⁾は「瘖」「瘖」の2字、弘治二年本『倭玉篇』⁽¹²⁾および『玉篇要略集』⁽¹³⁾は「啞」「瘖」「瘖」の3字が載録されており、訓は2例か3例のみにとどまるようになっている。



図2 『和漢三才図会』「瘖瘖」「啞」
国立国会図書館蔵。

これら古代中期より中世後期にかけて編まれた字書に載録されている聾啞吃語彙を鳥瞰すると、「ミミシイ(ミミシヒ)」は古代より中世後期に至るまで一貫して用いられている一方、鎌倉時代には「キカス(聞かず)」が用いられたものの室町時代には廃れてしまい、南北朝時代の頃より「ミミツフレ(耳潰れ)」が用いられるようになった経緯が窺える。このような聾啞吃語彙史の概要は、古代中期より中世後期にかけて字書とは別に編まれた辞書(義書を含む)や医書に載録されている聾啞吃語彙にも窺える(末森2016)。そのような「啞」語史は近世中期に編まれた『和漢三才図会』見出項目「瘖瘖」の注文に「吃り」が見られることに端的に窺われよう。

4. 英語の聾啞語彙史

英語の [deaf]、[dumb]、および [mute] に関しては、語源学 (etymology) による語彙誌がまとめられている。[deaf and dumb] がゲルマン・アングロサクソン祖語に遡れる複合語であるのに対し、[deaf-mute] は [mute] がラテン祖語に由来する語であり、18世紀以降に新たに使われるようになったことが知られている。そのような歴史を包摂し、[mute] が比較的、現日本語の「啞」に近い語義を示すのに対し、[dumb] は現日本語の「啞」の他に「癡(知的障害)」という語義を持つ。後述するように、漢

(6) 応永本『字鏡集』(尊経閣文公蔵)

(7) 世尊寺本『字鏡』(世尊寺蔵)

(8) 黒川本『音訓篇立』(蔵)室町末期書写。

(9) 『捨篇目集』(国立国会図書館蔵)室町中期書写。

(10) 米沢文庫本『倭玉篇』室町後期書写。

(11) 『玉篇略』(大東急記念文庫蔵)1532年書写。

(12) 弘治二年本『倭玉篇』(蔵)1556年書写。

(13) 『玉篇要略集』(大東急記念文庫蔵)1524年書写。

字文化圏における「聾啞」と欧米における [deaf and dumb] はけっして同義ではなく、むしろ相当な齟齬を示すことが窺われる。

5. 「聾史」と「Deaf History」

Google Books Ngram Viewerで [deaf history] を鍵語として検索をおこなうと、1970年代以降に [deaf history] が用いられるようになったことが窺われる。それは手話言語学の確立や民族誌の変容と大きな関係があるものとも考えられる。

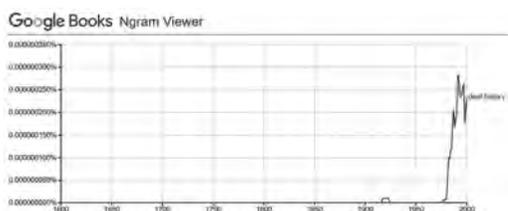


図3 [deaf history] の語使用頻度

もっとも、1970年代以前も [the history of deaf and dumb] というような用語は使われていた模様である。一方、日本語のほうは『日本聾啞秘史』や「日本聾啞史稿」という文献の表題にみられるように「聾啞史」という用語が使われていたものとみられる。しかし、20世紀後半における「啞」の死語化に伴い、「聾啞史」も「聾史」に変化してきたものとも考えられる。しかし、日本の聾文化論が欧米、特に米国の聾文化論の大きな影響を受けたのと同じように、日本の聾史活動も欧米の [deaf history] という用語の大きな影響をうけたものと見なしても一概にうがち過ぎとも言えないであろう。

ただ、日本語の「啞」と英語の [dumb] は一見対応する語動詞に見えて、その語誌・語史的背景には大きな相違がある。すなわち、日本語の「啞」は、中世以降「癡」との形式・意味・用法におけるゆるやかな分離が顕著な傾向として伺われるのに対し（末森）、英語の [dumb] は日本語の「啞」に該当する意味と「癡」に該当する意味の両方を包摂する多義性語として使われてきた。したがって、20世紀中期より欧米の聾共同体が積極的に [deaf and dumb] を [deaf/Deaf] に替えてきた現象に示されるような [Deaf History] は、必ずしも日本の聾共同体における聾啞語彙史と一致するわけではない。

史学や民族誌の研究にあたっては、現在の社会通念に沿って過去の事象を分析する姿勢以上に、その事象が起きた当時の社会の生活文化や概念に可能な限り立脚して過去の事象を分析する姿勢が望まれる。上記のように近世以前は「啞」が「仕方・手真似」と近接的換喩の関係にあり、「聾」が「仕方・手真似」と近接的換喩の関係にあったわけではない。「聾」が「手話言語」と近接的換喩の関係を越えて、文化本質主義的性格をあらわにするようになったのは1970年代以降のことに過ぎない（山下2015）。そのようなきわめて現代的な視点のみにより聾者や聾啞者の歴史を研究する領域を「聾史」と位置づけるのは片手落ちではなかろうか。20世紀中期以前の当事者（聾者や聾啞者）の視点に立ち20世紀中期以前の事象を分析する場合、「啞」を中心に据えた概念編制を射程にとらえる姿勢は必要不可欠なものであるとも言えよう。すなわち、い

たずらに欧米の [deaf history] にしばられることなく、日本の聾者や聾啞者の歴史を振り返るにふさわしい用語は「聾史」ではなく「聾啞史」である可能性にも想いを至らせることが望まれよう。

末森明夫・高橋和夫 (2017) 「狂言台本における聾啞語彙表記の変容」『国語語彙史の研究』 36 : 193-208.

山下恵理 (2015) 「deafness論の可能性へ —ろう文化論を聞こえない身体から考える」『年報カルチュラル・スタディーズ』 3 : 173-187.

参考文献

Krentz, C. (2007) *Writing Deafness: The Hearing Line in Nineteenth-Century American Literature*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press.

Mirzoeff, N. (1995) *Silent Poetry: Deafness, Sign, and Visual Culture in Modern France*, Princeton: Princeton University Press.

岡山準 (1935) 「日本聾啞史稿」『東京聾啞学校紀要 第二輯』 1-36.

末森明夫 (2012) 「キリシタン版対訳辞書群及び洋学資料対訳辞書群における聾啞関連語彙」『日本障害学会第9回大会予稿集』 神戸市.

末森明夫・岡本洋・伊藤照美 (2014) 「『日本聾啞協會創立協議委員会記録』攷 —〈聾啞〉と〈聾〉における当事者性の相克—」『日本障害学会第11回大会 発表要旨』 沖縄市: 日本障害学会.

末森明夫 (2015a) 「日本の聾啞空間の親密圏・中間体・公共圏の変容に伴う「いわゆる日本の手話」の変遷」『生存学』 8 : 178-194.

末森明夫・新谷嘉浩 (2015 b) 「キリシタン版対訳辞書群における聾啞関連語彙」『国語語彙史の研究』 34 : 261-278.

末森明夫 (2015c) 「「キリシタン版対訳辞書群における聾啞関連語彙」補遺」『聾史研究』 2 : 3-21.

末森明夫・高橋和夫 (2015d) 「『養老令』『戸令』〈目盲条〉の障害関連語彙に関する認知意味論的考察 —「癡瘖」の類義語並列構造から古代漢字文化圏における障害関連語彙の位相へ」『日本障害学会第12回大会』 西宮市.

末森明夫・高橋和夫・TIJSSELING, C. (2016a) 「洋学資料における「態」概念の照射」『日本手話学会第42回大会』 東京.

末森明夫・高橋和夫 (2016b) 「「高宗諒陰三年不言」攷 —障害学的視座による再検証」『人文』 14 : 137-148.

末森明夫・高橋和夫 (2016c) 「聾啞概念編制史の地平 —論文「日本聾啞史稿」の考察を通して—」『歴史言語学』 5 : 39-53.